

## 私の研究と創作

史傑鵬<sup>1</sup>

李丹丹<sup>2</sup>訳

キーワード：戸籍簿（戸口本）、王国維、古代文字学、亭長の武さん（亭長小武）、魯迅

私は中国江西省の南昌市<sup>3</sup>郊外の農民の家に生まれました。父は米を、母は野菜を作っていました。当時の中国では、農民という身分はとても低く、戸籍簿<sup>4</sup>に必ず「農村戸」の三文字がはっきり書き入れられます。それは大学に合格した場合を除いて、必ず農業を受け継ぎ、生涯農村から離れられないことを意味します。また農民は作物や税金を納めなければならない一方、いかなる福祉も受けることができません。都会の人にとって農民と結婚することは、自ら火の中に飛び込むようなもので、法律上の規定はありませんが、実質的に都会の人と結婚はできません。この屈辱から抜け出すためには、当時は、大学に合格するか、兵士になるか、労働者になるかといった数少ない方法しかありませんでした。兵士になる場合は、幹部に選抜されるしか都市に残る機会がなく、労働者になるには一九七、八十年代は、夜明け時の星ほどに少ない機会を待つしかありません。大学に合格することは、（農村から抜け出すのに）唯一実行できそうな手段でした。しかし、当時大学はエリートが行くところであり、合格率<sup>5</sup>が極めて低く、入るのは非常に困難でした。私が住んでいた地区では、前後数十年の間、大学に合格した人の数は合計で十人にも満たなかったのです。私は幼い頃から、運命を変えられるのかどうかは学校の成績次第だ、と教えられました。

中学・高校<sup>6</sup>時代、私は中国の古典文学が大変好きでした。『詩経』<sup>7</sup>や『楚辞』<sup>8</sup>、唐詩や宋詞<sup>9</sup>など、目にする手放せませんでした。これは恐らく生まれつきのものです。しかし当時は、どのような本でも手に入れるのは簡単ではありませんでした。学校には図書室がなく、普通の家庭にも蔵書がほとんどありません。私がいたような田舎では、教科書以外の本

<sup>1</sup> 東京大学東洋文化研究所訪問研究員・作家。2018年12月12日に人文学部「多文化交流サロン」第11回として史氏の講演が行われた。本稿はその記録である。

<sup>2</sup> 信州大学人文学部非常勤講師。上記の講演に際して通訳を務めた。

<sup>3</sup> 南昌市：江西省の省都。史傑鵬氏は1971年にその郊外で生まれた。

<sup>4</sup> 戸籍簿：中国語の原文は“戸口本”。居民戸口簿の俗称。戸籍に相当し、農業戸口と非農業戸口とに分けられる。この単語は後に、史氏の小説タイトルとして改めて登場する。

<sup>5</sup> 合格率：中国語の原文は“録取率”。ここでは大学進学率を指す。2019年現在は50%に迫る勢いだが、以前の中国における大学進学率はかなり低く、2007年で23.0%、1990年では3.4%だった（『中国教育統計年鑑』2007年版参照）。

<sup>6</sup> 中学・高校：中国語の原文は“中学”であり、日本語でいう「高校」も含む。

<sup>7</sup> 『詩経』：中国最古の詩集。孔子の編纂とされ、北方系の無名氏の作品群を収める。

<sup>8</sup> 『楚辞』：『詩経』に次いで古い詩集で、屈原の作品など南方系の作品群を収める。

を買う金銭的余裕がありませんでした。私は母がくれた小遣いで、こっそり『白居易<sup>10</sup>詩選』という本を買ったことがあります。その時は父に見つかり、父はその場でびりびりに破ってしまった後でも気が済まず、拾い上げて本の上にしかりと「猥褻なものを読み、青春を無駄にし、生命を無駄にする、恥ずかしく、悲しい限りだ!!!」とまで書き込みました。最後の三連の感嘆符はたいそう仰々しいものでした。その大げさな文体と符号のつけ方は、恐らく文化大革命時代に街に溢れる壁新聞<sup>11</sup>に教わったものだったのでしょう。

しかし、私はショックを受けませんでした。本を買うお金はないので、新華書店<sup>12</sup>に行って読み、読みながら暗唱しました。あの頃私は記憶力がよく、いつも数回読んだだけで、すらすら暗唱できるようになりました。その後、大学を受験する時、私は迷うことなく中国文学部<sup>13</sup>と歴史学部<sup>14</sup>を希望しましたが、歴史の点数が不合格だったからでしょうか、中国文学部が私を採ってくれました。

私は文学部に入って、人生は大変幸せなものだと思いました。文学書を読むことが私の専門になったので、もうこっそり文学書を見つけて読む必要がなかったからです。父は理工学（理系）の崇拝者で、文系を軽蔑していました。でも、父は何かはっきりした理念を持っていたわけではなかったので、私が大学に合格し、農村から抜け出ることだけでも十分満足していました。私が進学した大学は江西師範大学<sup>15</sup>です。通常は、卒業したら中学・高校教師の仕事を得て、毎月給料をもらい、商品化された食糧<sup>16</sup>を買い、医療と社会保険を受けることとなります。田舎の人から見れば、これは天国にいるような生活です。

しかし、大学に入って間もなく、新鮮さが消え、新しい悩みができました。それはいったいどんな悩みだったのかは忘れましたが、毎晩図書館に本を読みに行く時、常に何か悲しみを感じていました。目に見える将来への不満なのか、恋人がおらず孤独だったからか、よくわかりません。ある夜の出来事です。私はいつものように図書館で『紅樓夢<sup>17</sup>』についての研究書を読んでいました。その時、私はすでに図書館にあるほとんどの『紅樓夢』の研究書を読み尽くし、庚辰本と甲戌本<sup>18</sup>の脂硯齋<sup>19</sup>による評語と注釈を、手持ちの『紅樓夢』に書き写してしまうほどでした。しかしあの夜、私はいつもと違う文章に出会いました。王国

<sup>9</sup> 宋词：詞（ci）は、宋代などに栄えた詩歌のジャンル。

<sup>10</sup> 白居易：中唐の詩人。白楽天。『長恨歌』のようにロマンチックな詩もある。

<sup>11</sup> 壁新聞：中国語の原文は“大字報”。“!!!”と感嘆符を連ねるなどして、他者の攻撃にも使われた。

<sup>12</sup> 新華書店：かつての中国で一般的な書店の名称は、ほとんどが「新華書店」だった。

<sup>13</sup> 中国文学部：中国語の原文は“中文系”。“系”は日本における大学の「学科」に相当するが、学科が学部にも所属する日本のスタイルとは異なり独立した組織。“中文”は中国語学・中国文学を指す。

<sup>14</sup> 歴史学部：中国語の原文は“歴史系”。注13を参照。

<sup>15</sup> 江西師範大学：江西省の教員養成系大学。

<sup>16</sup> 商品化された食糧：中国語の原文は“商品糧”。商品として流通している穀物類を指す。当時は改革開放政策が始まったばかりで、購入には“糧票”＝「食糧配給切符」が別に必要だった。

<sup>17</sup> 『紅樓夢』：清代の長編小説で、日本文学における『源氏物語』に相当する傑作。

<sup>18</sup> 庚辰本、甲戌本：『紅樓夢』の初期のテキスト。それぞれ1760年、1754年の写本で、前者はほぼ完存し、後者は残本だが現存最古とされる。

維<sup>20</sup>の「紅樓夢評論」<sup>21</sup>です。この文章は、私の進む道を変えました。

この文章で王国維は、ドイツの哲学者ショーペンハウアー<sup>22</sup>の厭世主義哲学を用いて、『紅樓夢』の主題についてまとめていました。人生は苦痛と退屈の間に揺れ動いており、たとえどのように満たされても、すぐに虚しさと苦痛に陥ってしまうのだ、と。それは当時の自分の気持ちにぴったり重なったので、私は震える手でノートを取り出し、この文章を丸ごと写し書きました。実際のところ、王国維の著作は、私が中学・高校の時に世にも有名な『人間詞話』<sup>23</sup>をすでに読んだことがありました。しかし彼が哲学も研究していたことは知りませんでした。『紅樓夢評論』は文語体<sup>24</sup>で書かれたもので、正直、今見れば彼の文語はあまり上手とは言えず、数多くの西欧風の語彙と文型が混ざっていました。でも、当時の私は文学的美しさを感じました。例えば、ゲーテ<sup>25</sup>のとある詩を「人の世の専ら吾らを悲しませるものも、芸術の衣をまよえば心楽しく見える」と訳しました。また、ビュルガー<sup>26</sup>の詩を訳した際の優美な言葉遣いは、彼が普通の古代文学研究者ではないことを示していました。私は好奇心を抱き、王国維が一体どのような人なのかを知りたくなりました。

たくさんの資料を調べると、案の定、王国維は並みの学者ではなく、不世出の大学者だったことが分かりました。彼の主な成果は甲骨文や金文<sup>27</sup>、及びそれに関連する上古史<sup>28</sup>の研究であり、それによって不朽の名を残しました。しかし、彼の政治的理念は比較的保守的で、清王朝が滅びた後、日本に亡命したことがあります。京都に住み、たくさんの日本の学者と行き来していました。やがて帰国し、清華大学の国学研究院<sup>29</sup>で教鞭をとり、退位した宣統皇帝<sup>30</sup>に忠誠を尽くしました。最後は心理的な苦しみに耐えられず、1927年自ら頤和園

<sup>19</sup> 脂硯齋：『紅樓夢』の作者である曹雪芹に非常に近いと考えられている人物。脂硯齋による評注（コメント）が古い写本には記され、紅樓夢創作のプロセスを探る貴重な手がかりとなっている。

<sup>20</sup> 王国維：清末から民国期にかけて、中国文学や歴史研究に大きな足跡を残した大学者（1877-1927）。

<sup>21</sup> 「紅樓夢評論」：『中国現代文学選集』1に訳注がある（平凡社1963年）。

<sup>22</sup> ショーペンハウアー：ドイツの厭世的哲学者 Arthur Schopenhauer (1788-1860)、主著は『意志と表象としての世界』で、王国維はそこに見える芸術論に影響を受けている。

<sup>23</sup> 『人間詞話』：中国語の“人間”とは「人の世」を指す。“詞”は主に宋代と清代に栄えた詩歌のジャンル（注9参照）であり、その詞に関する一種のエッセイ集。

<sup>24</sup> 文語体：中国語の原文は“文言”。書き言葉、特に五四運動以降使われなくなった古い文体。

<sup>25</sup> ゲーテ：ドイツの詩人、小説家、劇作家 Johann Wolfgang von Goethe (1749-1832)。「人の世の専ら吾らを悲しませるものも、芸術の衣をまよえば心楽しく見える」という詩句が、「紅樓夢評論」第1章に見える。

<sup>26</sup> ビュルガー：ドイツの詩人 Gottfried August Bürger (1747-1794)。ここは、その「ああ、なんじ哲人……」という詩の一部が「紅樓夢評論」第2章に見えるのを指す。なお哲人といえば、王国維にはカントを歌った「汗徳像賛」がある。王国維が著作活動をしていた当時、中国語でカントは“汗徳”と表記していたが、現在では“康德”と書かれる。

<sup>27</sup> 甲骨文や金文：甲骨文は殷代の文字、金文は周代を中心に青銅器などに鑄込まれた文字。

<sup>28</sup> 上古史：王国維は、甲骨文を解説して文献上の系譜とはほぼ一致することを示し、殷王朝の存在を明らかにした。いわゆる「二重証法」として有名である。

<sup>29</sup> 清華大学の国学研究院：中国語の原文は清華大学国学研究院。清華大学は北京市中心部の北側にある名門大学。国学研究院は中国伝統文化を研究する部門。

<sup>30</sup> 宣統皇帝：ラストエンペラーとして世に知られる、清王朝末代皇帝である溥儀のこと。

の昆明湖<sup>31</sup>に身を投じました。享年わずか50歳でした。

王国維はその学問のみならず、死に方まで格好いい、と当時の私は思いました。自ずと彼は私の憧れの的になり、私は彼を目指すことにしました。そこで彼がもっとも成果を上げた、古代文字学を学ぶことにしました。

古代文字学を選んだのはもともとの私の性格によるものでもあります。私は中学・高校の時から、絵画や篆刻<sup>32</sup>が好きで、すべての篆書<sup>33</sup>を上手に書くことができました。また、当時『尚書』<sup>34</sup>や『詩経』などの本を読んだ時に、ついていた注釈に困惑したことも、理由の一つです。古典ではとりわけ同じ字なのに、違う解釈であることがよくあります。例えば“肆”という字は『尚書』によく現れますが、「今」と解釈されたり、「大（きい）」と解釈されたり、「延（ばす）」と解釈されたり、「故」と解釈されたりします。どうしてそうなるのでしょうか。私は丸暗記が嫌いなので、はっきりさせなかったのです。このような難問は古代文学を習っても解決できませんが、古代文字学なら可能です。

それで私は中学・高校教師になるのをやめ、大学院に入ることを目指しました。大学四年生の時、私は希望通り北京大学の中国文学部の院に合格し、李家浩<sup>35</sup>先生の元で勉強しました。李先生は中国の最も素晴らしい、無二の戦国文字<sup>36</sup>の専門家です。彼は控え目な性格のためか、専門外の人にはあまり存在を知られていませんでした。先生の弟子になれたのは幸運なことでした。先生は生涯あまり弟子を受け入れず、合計でも10人以下です。でももし彼は、私が生まれつき、（文字学ではなく）文学へ情熱を持っていることを知っていたら、受け入れてくれなかったかもしれません。

実際のところ、私にとって文学の創作は大学時代からの趣味でした。大学に入るまで、私は文学という概念がありませんでした。あの当時は、たとえ党報<sup>37</sup>であっても字さえあれば、どんなものでも読んでいました。「純文学」と「大衆文学」の区別もよく分かっていませんでしたが、何となく、味わい深い作品と雑な作品の違いを感じていました。大学に入ってから、数多くの同級生が詩を書くことに気づきました。ただ彼らが書いていたのはみな新体詩<sup>38</sup>で、私は新体詩を好きではなかったのですが、彼らを通じて、世の中に文学雑誌とい

<sup>31</sup> 頤和園の昆明湖：頤和園は北京市中心部の北西に西太后が作った広大な庭園で、そこには昆明湖という湖がある。

<sup>32</sup> 篆刻：木や石などの印材に篆書（注33参照）で印を彫ること。

<sup>33</sup> 篆書：秦王朝の始皇帝が統一した書体、小篆。それ以前には大篆（籀文）があった。

<sup>34</sup> 『尚書』：五経の一つ、いわゆる『書経』のこと。

<sup>35</sup> 李家浩：古文字学者、北京大学元教授（1945-）。指導教員は裘錫圭氏で、ともに銀雀山漢墓や望山楚墓の竹簡調査などに当たっている。

<sup>36</sup> 戦国文字：春秋時代と秦王朝・漢王朝の間、およそ紀元前5世紀～紀元前3世紀ごろの諸国で用いられていた文字。

<sup>37</sup> 党報：広く中国共産党の機関紙を指す。

<sup>38</sup> 新体詩：中国語の原文は“新詩”。文学革命（1917）頃から書かれるようになった口語詩。

うものが存在していることが分かりました。それで私は図書館に行って、文学雑誌を見つけて読みました。私たちの大学の近くに、夕方になると、古い定期行物を売る露店がありました。『小説月報』や『小説選刊』<sup>39</sup>などが売られていました。大学にも「現代文学」という授業があり、私は現代のたくさんの作家を知るようになりました。図書館や買ってきた古い雑誌を通じて、私は彼らのほとんどの作品を読み、夢中になった時期がありました。私は歴史アクションドラマが好きでしたが、文学雑誌を読んでからはそれがつまらなく感じるようになりました。また「外国文学」の授業を通じて、たくさんの外国の小説も読みました。好きな作家はツルゲーネフ<sup>40</sup>、チェーホフ<sup>41</sup>、ディケンズ<sup>42</sup>、フォークナー<sup>43</sup>、サリンジャー<sup>44</sup>、ヴェルヌ<sup>45</sup>、ユゴー<sup>46</sup>などです。マルケスの『百年の孤独』<sup>47</sup>など、ラテンアメリカのマジックリアリズム<sup>48</sup>小説も読みましたが、あの当時は羅列した記述のように感じられ、あまり好きではありませんでした。日本の作家の中では、芥川龍之介、川端康成、谷崎潤一郎が好きでした。全体的に言えば、私は癖のある、あるいは情感が細やかな作品が好きでした。これらの外国文学作品を読んだ後で、中国の作家は全体的にいうと、外国の作家に対する模倣が多く、独創性が足りないことに気づきました。でも、彼らは私の母語（中国語）で創作活動をしているから、私はやはり彼らが好きです。私は独特で面白い表現方法の作品が好きです。これについては、蘇童<sup>49</sup>が素晴らしいと思います。その後の余華<sup>50</sup>もなかなか特色があります。莫言の『赤い高粱』<sup>51</sup>に驚かされたこともありますが、その後の作品はあまり気に入っていませんでした。いろいろと比べた結果、当然ですが、近現代でも最も素晴らしい作家

<sup>39</sup> 『小説月報』、『小説選刊』：前者は1910年、後者は1980年に創刊の文学雑誌。1980年代に中国の改革開放政策が始まったが、娯楽はまだ少なく、活字に飢えている人も多かった。

<sup>40</sup> ツルゲーネフ：ロシアの小説家 Ivan Sergeevich Turgenev (1818-1883)。『はつ恋』などが有名。

<sup>41</sup> チェーホフ：ロシアの小説家、劇作家 Anton Pavlovich Chekhov (1860-1904)。『かもめ』『三人姉妹』などが有名。

<sup>42</sup> ディケンズ：英国の小説家 Charles John Huffam Dickens (1812-1870)。『クリスマスキャロル』などが有名。

<sup>43</sup> フォークナー：米国の小説家 William Cuthbert Faulkner (1897-1962) 1949年ノーベル文学賞受賞。『響きと怒り』などが有名。

<sup>44</sup> サリンジャー：米国の小説家 Jerome David Salinger (1918-2010)。『ライ麦畑でつかまえて』などが有名。

<sup>45</sup> ヴェルヌ：フランスの小説家 Jules Gabriel Verne (1828-1905)。元祖 SF 作家とも言われる。『海底二万里』『八十日間世界一周』などが有名。

<sup>46</sup> ユゴー：フランスの詩人、小説家、劇作家 Victor-Marie Hugo (1802-1885)。『レ・ミゼラブル』などが有名。

<sup>47</sup> 『百年の孤独』：コロンビアのガルシア・マルケス (1982年ノーベル文学賞) による長編小説。ある一族の村の成立から滅亡までを、虚々実々に描く。

<sup>48</sup> マジックリアリズム：日常と非日常の入り混じった芸術的手法。

<sup>49</sup> 蘇童：現代中国の作家 (1963-)。代表作である『妻妾成群』は、中国を代表する映画監督・張芸謀によって1991年に『紅夢 (大紅灯籠高高掛)』として映画化され、邦訳もある。

<sup>50</sup> 余華：現代中国の作家 (1960-)。『兄弟』またエッセイ集『ほんとうの中国の話をしよう』など邦訳多数。『生きる (活着)』は、張芸謀監督により1994年に映画化された。

<sup>51</sup> 莫言の『赤い高粱』：莫言 (1960-) は現代中国の作家であり、2012年ノーベル文学賞受賞者。マジックリアリズム的な作風で知られる。代表作『赤い高粱 (紅高粱)』は張芸謀監督によって1987年に映画化され、邦訳もある。日中戦争の描き方などが注目される。

やはり魯迅だと思いました。彼は正真正銘の文学の巨匠です。アメリカの言語学者サピア<sup>52</sup>は、文学というものは、平凡な出来事を面白く書けることだ、と言います。しかし、結局のところ、これは言語を操る能力とはあまり関係がないのです。平凡な出来事を面白く書くには、独特な視点のほうがかっと必要です。ですから、優れた小説家はみな思想家でもありません。これが分かってから、私は魯迅が現代作家の誰よりも優れている原因がわかりました。魯迅は思想家であって、その思考が独特であり、その上に古典の教養が深く、表現も簡潔で真に迫っています。無論、彼の文章のところどころには若干古い表現があり、現代人には少し馴染めないところもありますが。

大学時代、私は試みに短編小説を書いていましたが、王国維を見習う決意をしてからは中断しました。当時は専念して勉強しなければならない科目が多く、古代文字学、音韻学<sup>53</sup>、訓詁学<sup>54</sup>などがありました。中でも一番頭を悩ませたのが音韻学でした。たくさんの本を読みましたが、まったく要領を得られませんでした。後でわかったのですが、それもそのはず、大学の先生の中でもそれを本当に理解する人は多くなかったのです。修士課程の入試で、音韻学に関わる点数を取れなかったため、面接の時、李家浩先生からどうして音韻学があんなにひどかったのか、と尋ねられました。私は自分が読んだ多くの本の名前を告げ、よく理解できなかったと認めました。修士課程の三年間、私はさらに音韻学に多くの精力を注ぎました。後に李先生は私にこう言いました。私が見たかぎり、古代文字学分野ではあなたは数少ない音韻学を理解する人の一人だ、と。音韻学がわかったことは私の関心を語源学に向かわせました。その後20年余りの研究生活の間、私は50篇あまりの論文を発表しましたが、語源学の角度から出土した文字資料を解説したものがかなりあり、このやり方は私の研究の一つの特色にもなりました。

しかし後に、自分が文学創作を忘れられないことに気が付きました。大学院に入学した当初、李先生は「私たちのこの分野では、十年以内の学術論文は必ず読みなさい、十年以上前のものなら無理に読まなくても構わない」と言いました。言外の意味はこのようなことでしょう。多くの研究者の論文は、十年後には新しい成果に取って代われ、ごくわずかな権威のあるもの以外、大多数の研究の仕事は学術史上で言及する価値がないものになる、と。これに私は少しがっかりしました。学術研究は文学創作の価値より劣っているように思いました。もちろん、後に私が時間をかけて創作する最も大きな理由は、社会の変化及び自分の心の命ずるところにあります。ここでいう社会の変化とは、インターネットの出現と密接な関係にあります。

インターネットが現れる前の中国社会は閉鎖的なもので、私たちは外の世界がどのような

<sup>52</sup> サピア：アメリカの人類学者、言語学者 Edward Sapir (1884-1939)。「サピア&ウォーフの仮説」で知られる。

<sup>53</sup> 音韻学：言語学のジャンルの一つ。中国語では主に歴代の辞書類や現代の諸方言、さらには近隣諸地域の漢字音などを手掛かりとして、古代や近世における発音を研究する。

<sup>54</sup> 訓詁学：経典の注釈など、漢字の読み方を通して思想内容まで探る学問のこと。

ものなのかを知りませんでした。知っていたのは、自分と周りの人が貧しく、国を出て外の世界を見られる人はごくわずかだということだけでした。かつて新聞でこのような記事を読んだことがあります。日本に留学する中国人留学生は、学校が小さな町にあり、アルバイトをする機会がないため、しばらくすると相次いで逃げ出しました。地元の人たちは名残を惜しみ、次々と駅に行って止めようとしてきました。このような記事を読んでも、私たちは相変わらずアメリカ、日本、西ヨーロッパ、ロシア以外の大多数の国々が、中国には及ばないと思っていました。しかし大学院に入り、数人の韓国人の家庭教師を務めたことで、日本は言うまでもなく、韓国も私たちよりずっと裕福だと、やっと知ることができました。北京大学にいた頃、森本という日本人がいて、用がなくてもよく訪ねてきて、寮の皆にご馳走をしてくれました。彼の中国語は私よりも流暢で標準的でした。彼はこう言いました。「知っているかい、私たち日本では普通の会社員でも一ヶ月の給料の半分を出せば、子供を北京大学で一年間留学させることができる、しかもあなたたちが食べている、豚の飼料のような（まずい）食事を食べずにね」と。インターネットがあるようになってから、外国の情報が次々に押し寄せてきました。私はようやく自分の国がどんなに遅れているのか、そして魯迅が当時あんなに激しく、鉄が鍛えても鋼にならない（国民が奮起しない）ことに苛立っていたのはなぜかを、骨の髄まで痛感しました。そして私も何か物を言いたくなりました。インターネットを通じて、これまで古代文字学を研究していた私は、西洋の政治学や哲学、社会学の著作を大量に読むようになり、物事に対する理解がどんどんはつきりしてきました。あの時代は、インターネットはまだ新しいものであり、ほとんど取り締まりがなく、言いたいことを思う存分言っていました。数えきれないほどの人がインターネット上で小説や各種の評論を発表しました。その多くは社会主義の価値観に合致するとは言えませんでした。ネットユーザーたちが殺到して、まさに百花斉放、百家争鳴<sup>55</sup>というべき状況でした。この時期はここ何十年の間の中国において、言論が自由だった黄金時代でした。

北京大学の院を修了後、私は北京師範大学<sup>56</sup>に配属され、学術研究の仕事をしました。普段接する人はみな学術関係の人達で、実際の創作の世界とは接点がありませんでした。しかしインターネット上の賑やかさを見て、突然自分の文学熱が甦りました。大学時代に書いた小説や、各種のエッセイ、随筆などをパソコンに入力して、インターネット上で発表しました。すると思いも寄らず、多くの人の熱烈な反応がありました。しばらくして、友人数人とホームページを作り、「七十年代生まれ——新学院ウェブサイト」と名付けました。一緒にホームページを作った人はほとんどが北京大学時代の同窓生で、アクセスを増やすため、皆先頭に立って文章を書きました。程無くして旧作は使い終わり、新作を書かなければなりません。さて、何を書こうか。私はかつて読んだ竹簡や帛書<sup>57</sup>に書いてあった内容を思い出しました。湖北省の張家山の漢代の墓<sup>58</sup>から出土した、漢代の竹簡である「奏讞書」<sup>59</sup>には、生き生きた事件例がいくつかあります。例えば、このような話があります。一人の少

<sup>55</sup> 百花斉放、百家争鳴：もともとは1956年に中国共産党が呼びかけたスローガンで、人々に自由な発言を呼びかけたもの。しかし1957年の反右派闘争で状況は一変する。

<sup>56</sup> 北京師範大学：北京の教員養成系大学。史氏はその国学研究院で副教授を務めた。

<sup>57</sup> 竹簡や帛書：中国語の原文は“簡帛”。かつては竹簡や木簡、帛書（絹）などに記録は書かれた。

女が傘を差し、一つながりの銅銭を持ちながら路地を歩いていました。地面はぬかるんでいて、雨水が傘に当たり、大きな音がしていました。この音のために、少女は悪人が後ろから近付いてきたことに気づかず、背中を刃物で刺されてしまいました。刃物が非常に鋭かったので、なんと彼女は刺されても気づきませんでした。道端にいた婦人が、たまたま家の扉を開けて、それを目撃し驚いて叫びました……。このような細部の描写は本当に生き生きしたもので、私は真っ先にこれを短編小説に改作しました。数回連載した結果、多くの読者から面白いので長篇にしてほしいとの声がありました。それでサイトの人気を上げるため、自分の想像で物語を盛り込んでいきました。私は毎日一節ずつ書き続け、八カ月連載して、完成しました。するとすぐに出版社が訪ねてきて、正式に出版してほしいと求めてきました。この本の名前は『亭長の武さん』<sup>60</sup>（原題：『亭長小武』）です。この本は当時よく売れました。内容が漢代の法律、風俗、文化の知識に触れているため、文化人を中心に大きな反響がありました。当時たくさんの新聞や評論家が好意的な書評を発表し、後に中国最大の映像作品制作会社である、チャイナ・フィルム・グループ（株式会社）<sup>61</sup>がドラマ化するため著作権を買い取り、ドラマにする予定でいました。ところが、シナリオが出来上がった頃、中国広電総局<sup>62</sup>から時代劇の放映を制限する、という行政命令が出たため、計画はお流れになりました。中国では、芸術家は創作の自由がありません。たった一枚の行政命令で人の努力を台無しにすることができます。でも全体的に言うと、この小説は比較的うまくいったほうで、間もなく第五版が世に出ます。また、英文にも翻訳されました。いまだに私の最も売れている小説です。この本は芸術的には間違いなく幼稚なものですが、私にとっては一里塚のような意味を持っています。私は編集者や誰か文壇の人と知り合いにならなくても、読者さえいれば創作することができる、とわかりました。

また、この経験を通じて、私は中国文壇の酷さもわかりました。とある著名な評論家はこのように言ってきました。「君のこの小説は大変特徴のあるものだ。君が少しお金を出す気があるなら、私は人を集めて『文芸報』<sup>63</sup>で討論会を企画したり、なにか賞を与えたり、なんでも操ることができる」と。私は当時とても純粋で、とんでもないことだと思いましたが、後に文壇は大概そのような状況にあるのだ、と思い知らされました。互いにほめそやし、まるでショーペンハウアーが言う通りです。（あの）評論家や作者たちは、互いにほめそやし、互いに媚びへつらう。その目的は売れるため、皆で売れよう、と。

<sup>58</sup> 湖北省の張家山の漢代の墓：中国語の原文は“湖北張家山漢墓”。1983年以降、大量の竹簡などが発掘された。

<sup>59</sup> 「奏讞書」：漢代の裁判記録。ここではその案例22を指すか。池田雄一編『漢代を遡る奏讞—中国古代の裁判記録—』（汲古書院、2015年）参照。

<sup>60</sup> 『亭長の武さん』：宿駅の役場の長である武さん、の意。亭長は、漢の高祖劉邦もかつて務めた役職名。

<sup>61</sup> チャイナ・フィルム・グループ（株式会社）：中国語名は“中国電影集團”。1992年にいくつかの映画製作所などが合併して成立した映画会社。

<sup>62</sup> 中国広電総局：かつて中国政府のラジオ・テレビ・映画を所管していた部局。2013年に後出の新聞出版総署と統合され、国家新聞出版広電総局となった。さらに2018年には国家広播電視総局となり、ニュース・出版と映画は、宣伝部の職掌となった。

<sup>63</sup> 『文芸報』：週三回、文学・芸術の評論を中心に発行される有力な新聞。

もしインターネットがなかったら、私が小説家になれたのかどうか、それはよくわかりません。

あれから、私は次々といくつかの歴史小説を書きました。台湾のある編集者も人を通して私に連絡してきて、台湾での出版権を買い取りました。彼が言うには、私の小説の中には大陸のほかの歴史小説にないものがある、それは個人を尊重することだ、と。以前の大陸の歴史小説の主人公は皆愛国心が強く、正義感のある凛々しい人間ですが、私の小説の主人公たちは愛国的とは限りません。朝廷が自分に十分なことをしてくれなかったのではないか、それとも自分が朝廷対して悪いことをしたのかについて、ずっと考え続ける人たちです。例えば、『漢書』<sup>64</sup>にこのような記載があります。(漢の)李広<sup>65</sup>將軍の孫である李陵<sup>66</sup>は負け戦をしたため、匈奴に降服せざるを得ませんでした。後に匈奴は使節である蘇武<sup>67</sup>を捕虜にしたので、彼が降服するように説得してほしい、と李陵を蘇武のもとに行かせました。ところが蘇武は拒否して、大義のためきびしく李陵を咎めました。それで李陵は良心に目覚め、自分の罪は天まで届く、と泣き叫びました。正統の歴史書においては、李陵は批判の対象で、蘇武は善玉です。しかし、私はそう思いません。李陵は悪くなく、蘇武のほうが少し愚かだと思えます。私のこの考えは、インターネット時代において、大量の政治学や哲学、社会学などの著作を読んだからこそ、出てきたものです。

現代を題材にした、最初の小説は『戸籍簿』<sup>68</sup>(原題：『戸口本』)です。これは比較的成功したもので、出版して一ヶ月でその年のテンセント・商報文学賞<sup>69</sup>を受賞し、すぐに増刷になりました。ところがその後すぐ編集者から、この本の思想が不健康であるため、新聞出版総署<sup>70</sup>に告発され、総署が名指しで本の提出審査をするよう出版社に命じた、と告げられました。社長が追い詰められ、自ら広州から北京へ飛んで釈明したと聞きました。当然、本の増刷は中止されました。半年後審査が終わり、30数カ所の添削を終え、ようやく再印刷が許されましたが、熱気はすでに冷めてしまいました。それでも、結局5回増刷しました。二人ほどの評論家が南方のとある文学賞に候補作として推薦してくれましたが、審査側はすぐに断ってきました。作者はイデオロギーに問題があり、応募する資格がないというのが理由でした。要するに新聞出版総署の審査を受けた、その影響が大きかったのです。

『戸籍簿』出版の翌年、私は次から次へと告発され、去年(2017年)の7月にはついに20

<sup>64</sup> 『漢書』：前漢について紀伝体で記した歴史書。

<sup>65</sup> 李広：北方の遊牧民族である匈奴に恐れられ、飛將軍と呼ばれた武人。

<sup>66</sup> 李陵：中島敦『李陵』参照。『史記』の編纂者として知られる司馬遷が、李陵を弁護して宮刑に処されたエピソードが有名。

<sup>67</sup> 蘇武：漢王朝の武帝時代の人。李陵とやり取りしたという詩が『文選』に見える。

<sup>68</sup> 『戸籍簿』：史氏の自伝的小説。広東人民出版社から2016年に出版された。

<sup>69</sup> テンセント・商報文学賞：テンセント(騰訊)は中国のインターネット企業。ここはテンセント・商報中国語良書・文学類良書賞(騰訊・商報華文好書・文学類好書獎)を指す。

<sup>70</sup> 新聞出版総署：中国政府のニュースや出版等を所管する部局だったが、その後、注62でも述べているように目まぐるしく変化している。ここでは旧称を用いている。

年も勤務していた北京師範大学の教職を奪われました。聞くところによると、かつて私の本を二冊出版した中華書局<sup>71</sup>の幹部はすぐ私の本を倉庫にしまい、再び日の目を見ないよう、命令を下しました。『亭長の武さん』の著作権は当時人民文学出版社<sup>72</sup>にあり、増刷の予定でしたが、これも直ちに中止されました。ドラマ化するため、この本の著作権を買い取ろうとして三度目になるあの映像会社となると、当然即座に契約を破棄しました。また、新作である『孫策暗殺』<sup>73</sup>（原題：『刺殺孫策』）の原稿は5月に引き渡しましたが、出版の見通しもつきませんでした。幸い、編集者はまっすぐな人で、リスクを冒して出版してくれることになりましたが、すぐに江西省宣伝部のある副処長<sup>74</sup>に告発されました。幸運なことに、新聞出版署の一部の幹部はまだしも考えが開けていて、これは歴史小説であって、イデオロギーに関係ないとし、告発を却下しました。しかし、出版社は書店に本を置くことや宣伝する勇気が無く、ネット書店で密かに売られるだけにしました。ある映画監督はこの本を見ると、すぐ訪ねてきました。著作権を買い取り、映画化したいと言いました。後に彼は私が大学を解雇されたことを聞き、ためらいましたが、やはり映画化したいようで、著作権価格を低くし、映画が完成した後も私が本名を署名しないことを条件とするよう、相談にきました。私ははじめ、きっぱり断りましたが、彼が手を変え品を変えて頼むので、やむなく承諾しました。どうせ置いておいても金にはなりません。値段は抑えられたのですが、北京師範大学の二年間の給料に相当する金額は得られました。

大学にいた時、文学創作は空いた時間に行いました。大学では論文を書く仕事があり、研究するのに大量な時間が必要でした。時々学術研究と文学創作は矛盾するように思い、悩むこともありました。あの魯迅も、学術と文学創作とは両立できない、と述べたことがありました。彼は若い頃日本に留学し、東京で章太炎<sup>75</sup>を先生として文字学を勉強しました。帰国した後、中山大学<sup>76</sup>で文字学の授業をしようとしたこともありました。彼は生涯の大部分の時間は他の職業に就いており、創作一筋ではありませんでした。しかし、私の考えは徐々に変わっていきました。良い小説家は別の職業に就くのがいいと思うようになったのです。異なる職業につくことで、様々な素材や思考力を得ることができ、生活の鍛錬によって成熟することもできますし、学術研究は創作の厚みを増してくれます。私の歴史小説で言えば、多くの人が考えるように、とくに漢代の法令や社会に対する細かい描写は、他の人が書く小説とは違っています。専門家でなければ、決して書けません。また現代を題材とした『戸籍簿』の場合も、言語学の知識が役に立ちました。もし私が学者でなければ、言語に関わる部分は正確に書けないはずで、例えば、中国に韓少功<sup>77</sup>という作家がいます。彼には

<sup>71</sup> 中華書局：中国を代表する出版社のひとつ。

<sup>72</sup> 人民文学出版社：中国の有名な出版社。

<sup>73</sup> 『孫策暗殺』：孫策は三国呉の孫権の兄。

<sup>74</sup> 江西省宣伝部のある副処長：江西省の、マスメディアを所管する部局の副部長級の人物を指す。

<sup>75</sup> 章太炎：近代中国の学者、革命家（1869-1936）、本名は章炳麟であり、太炎は号。魯迅に「太炎先生に関する二、三のこと」という回想記がある（『魯迅全集』8、学習研究社1984年参照）。

<sup>76</sup> 中山大学：広東省の名門大学。魯迅も一時期教鞭を執った。中山とは中国の政治家である孫文の号に由来する。

<sup>77</sup> 韓少功：現代中国の作家（1953-）。『馬橋辞典（馬橋詞典）』などが有名（注78参照）。

『馬橋辞典』<sup>78</sup>（原題：『馬橋詞典』）という小説があり、私はこの作品が大変気に入っています。ただ残念ながら、その中の馬橋という地方の言葉の発音に対する分析はほとんどでたためです。なぜなら、彼には言語学の教養がないからです。もしあれば、この小説はきっとさらに内容が豊かとなり、完璧に書かれていたことでしょう。逆に、イギリスの作家であるトルキン<sup>79</sup>は『指輪物語』<sup>80</sup>において、ミドルアース（Middle - earth）のために、システムの整った言語を作り出しました。彼自身は言語学者でした。またフランス作家であるフローベール<sup>81</sup>は小説を創作する時、細部を正確に描写するために、常に執筆しながら幅広く読書しました。一つの長篇小説を書くため、本を1500冊読み、それゆえなかなか完成に至らなかった、と彼は語ったことがあります。残念なことに、中国の現代の作家は、一般にこのような精神が欠けています。魯迅のような世代の作家との距離もまさにここにあると、私は思います。

魯迅は私のお手本です。私は将来彼の作品と同じくらい素晴らしい小説を書きたいと思っています。以上で私の話を終わります。みなさん、ご清聴ありがとうございました。

（2019年4月30日受理、5月21日掲載承認）

---

<sup>78</sup> 『馬橋辞典』：1996年出版の小説。辞書形式で、湖南省汨羅の馬橋という村について、文革期の下放経験を踏まえ、虚構を交えながら各項目を書く。セルビアの小説家ミロラド・パヴィッチによる『ハザール辞典』（1984）の影響が指摘される。

<sup>79</sup> トルキン：英国の作家 John Ronald Reuel Tolkien（1892-1973）。『指輪物語（中国語訳：魔戒）』など。

<sup>80</sup> 『指輪物語』：遠い昔のミドルアース（中国語訳：中土界）を描く幻想的長編小説で、作者トルキンの文献学者としての学識が色濃く反映されている。

<sup>81</sup> フローベール：フランスの作家 Gustave Flaubert（1821-1880）、『ボヴァリー夫人』などが有名。